兄には甘い母なので、「最近お兄ちゃんの様子が変なの」と言われても、私は聞き流していた。義姉が里帰りしたことを、母がやわらかく針で刺して責めているのだと考えて。昔から、母は義姉をよそよそしく扱った。私は、おっとりしているようで、どっしり構えた性格の義姉が、兄よりもずっと好きだった。

最後に義姉とモニター越しに話したのは、一ヶ月ほど前。色を失ってひとまわり以上も痩せた姿には胸が痛んだ。長いこと不妊に悩んだ末に授かった子を流産したその悲しみを、私はただ聞くことしかできなかった。小さな物音も気になってよく眠れないのだと言う目元はクマで真っ黒だった。

今朝、目覚ましアラームよりも早くに、またしても母からの電話で起こされた。

「ねえ、今日ちょっと仕事のあとにでも、お兄ちゃんの様子を見に行ってくれない？　おとといから連絡つかないの。週末にはお父さんと一緒に行くから。ね？」

実家からこの街まで、列車を乗り継いで二時間半。きっとふたりで喧嘩しながら来る。父の、ほっそりした溜め息が聞こえてきそうだった。

そういうわけで「夜に顔を出す」とメッセージしたのだけれど、兄の既読はつかず。

メゾネットのチャイムを鳴らしても応答がない。不用心にもドアは開いていた。異臭がする。生温かい酸っぱさと、汚物の臭いが絡み合っている。ハンドタオルで口と鼻をガードして、照明をつけた。階段には何もない。スリッパを拝借して二階へあがる。リビングで謎は解けた。散らかり放題に物があふれ腐敗して虫がわいている。吐き気がこみあがった。バルコニーの窓を開けるため振り返ったその先に、兄がいた。たぶん、兄だと思う。ぐったりと頭を垂れて椅子に座っている。異臭の原因は兄にもあった。どうやら糞尿が垂れ流れている。ひゅっと、心臓が縮こまった。死んでいるかもしれない。冷や汗が吹き出て脈拍が速くなるのを感じながら、兄の肩に手をかける。と、ふつふつと、何か喋っているのが聞こえた。生きている。かがんで、横から顔を覗きこむ。目を見開いた兄が流涎しながらつぶやいている。

「……きみの言うとおりだ……早くに処分したらよかったね……もう遅い……もう……」

義姉の言葉を思い出した。あの時、兄が義姉を呼びに来て、それ以上聞けなかったこと。

……彼が、あの古い椅子を買ってからの気がするんだ。悪いこと、みんな……

兄の座る椅子の脚から、真っ赤な液体が流れ広がり、そこに、ぽとん、ぽとん。眼球がふたつ落ちた。

奥様の癇癪のひどいことといいましたら……
わたしの大事なあの娘の目玉を、針で。
だからわたし、奥様の目玉をふたつ……
不幸を数えるほうがたやすいの。
本に石を結わえつけられてね、しずめられたの。
浮いてきたら魔女、浮かなければ人間だって。
私は人間です。
裏切られたことがないのザマさ。
裏切りつづけて、
もう渡せるお金はありません。
許してください、ゆるして。
私が首を刎ねられるまでの冒険。
聞いてくれるかい？
生きつづけることが辛かったのさ。
なのにまだ、生きているときのように辛い。
ひたすらに、生まれてから死ぬまでを、繰り返し、この椅子で見せられている。